



概要

インドと中国のチベット自治区に挟まれた所に位置し
様々な民族・言語と共存
人口の81.3% (2023年外務省データ) がヒンドゥー教であるが
イスラム教や仏教も混在
世界最高峰の山として知られる「エベレスト」の玄関口



研修目的

多文化共生社会が抱えている課題を現地で学び、多様性のあり方について考察する
異文化コミュニケーション能力を活用し、地域課題の発見

活動内容

ボランティア活動 「公園造り」「日本文化紹介」
施設訪問 「バネパ市役所」「Maiti Nepal」
実施調査 「水問題」「貧困問題」
文化体験 「ネパール語講座」「MOMO作り」
「結婚式出席」「世界遺産観光」



公園造り (活動前半)

内容

職人さんが作業を行いやすいように公園の整備
地域の子どもの居場所づくり

感想

公園造りでは、シャベルやクワ、木の板、土のう袋などの道具を使用し活動しました。当然、使い慣れない道具や、先の見えない作業でモチベーションが保てない状況になる時もありました。しかし、道具の使い方をレクチャーしてくれる村長さんや学校が休みの日に手伝いをしてくれる子どもたちなど、私たちは地域の人々の温かさで感動し、「彼らのために役に立ちたい」と思うようになりました。そして、ここでの活動が終わるころには、公園が完成する日が待ち遠しくなっていました。

活動場所

バネパ市 11区 シナガール



日本文化紹介 (活動後半)

内容

2つのグループに分かれ日本文化紹介の授業を2日間で4回実施

Aグループ

「クイズ」「みそ汁」
子どもたちは、日本食である「みそ汁」を躊躇うことなく口にしていました。飲み終わったあとに感想を聞くと、多くの子どもたちが「ミトチャ! (美味しい)」と返してくれたのが嬉しかったです。「クイズ」では、日本建築や着物の写真をまじまじと見つめ、日本に対して関心を持ってきている子どもたちが多いと感じました。

Bグループ

「折り紙」「けん玉」「お手玉」
折り紙を配ると、子どもたちは、カラフルな紙に興味津々でした。英語で説明を交えながら作成するも、苦勞する場面が多々ありました。そんな時、周りの子が私たちに代わってサポートしてくれ、無事に完成することができました。

活動場所

カトマンズ市 フツーン学校
Grade6, 7, の学生 (小学校高学年)



インフラ欠如～生活体験で見えたこと～



原因
急激に人口増加したことで
インフラ整備の費用不足が生じ
都市計画が滞ってしまった

現状
日本をはじめとする国々から
支援金を受け取り、道路整備を
進めている



人身売買の実態～Maiti Nepalの訪問～



暮らしの水～水と〇〇のつながり～

目的

日常生活から、ネパールの水に関する実態や住民の意識を明らかにする

日常生活

ヒマラヤ山脈の雪解け水があるため水資源は豊かであるが上手に活用できていないのが現状である

「水とシャワー」

現地の住民によると、シャワーを浴びる頻度は
「2日に1回」や「1週間に2度」
個人によって様々だが、シャワーは毎日
浴びないということが明らかになった



「水と水道」

ほとんどの家の屋根に貯水タンクが設置され
この水をキッチンやお風呂場
「水が出ない」という場合は、呼び水
を行い再度タンクに貯めなおす



「水とプラスチックごみ」

人々の暮らしの都市化は、プラスチック袋の
利用増加を招き、川へのポイ捨てが目立った
その結果、川の水の汚染、悪臭が問題が
大きな社会問題になっている



「水とトイレ」

現地の人々はトイレトーパーを使用せず
手で水道水を用いながら綺麗にする
紙が水に溶けないため、
トイレトーパーを流すことが
できないのが、要因の1つにある



貧困の姿～聞き取り調査を通じて～

多次元貧困 総人口
29,192,480人のうち
513万人

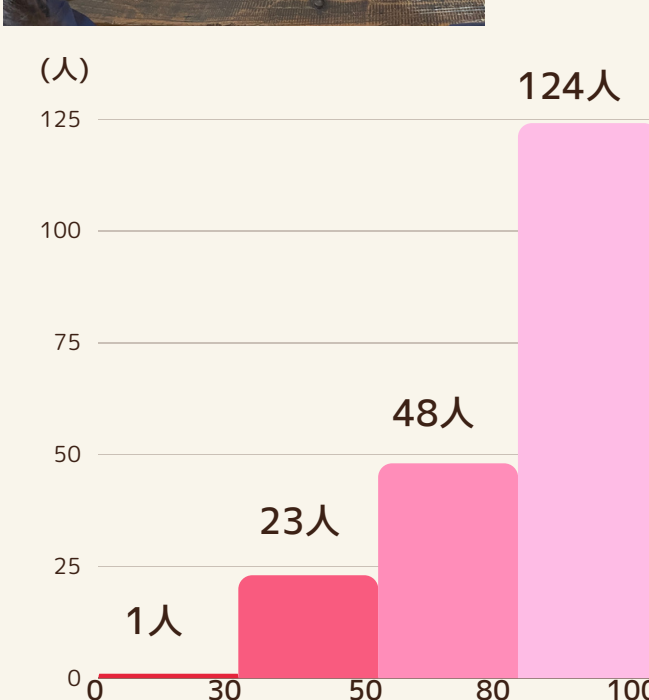
目的

第三者の立場を利用し、人々の率直な意見を汲み取り
ネパールの貧困の姿を明らかにしていく

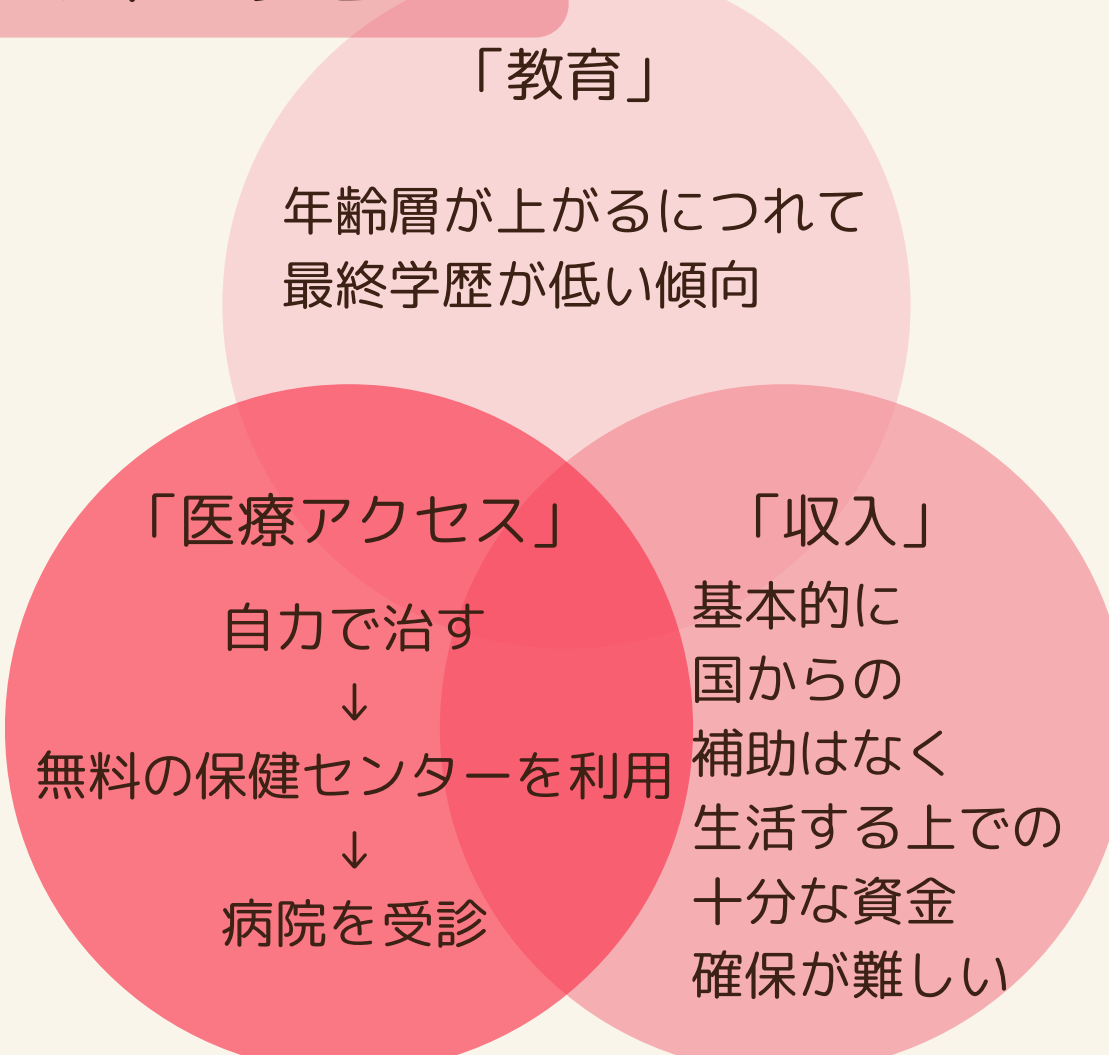
アンケート調査

フツーン学校 Grade6.7の学生 約200人

右) もっと良い学校に行きたいか?
左) 現在の生活に満足しているか?



女性へのインタビュー



行政が行う貧困改善のためのアプローチの方法

1. バネパ市長
市内にはUNESCO文化遺産をはじめとする多くの観光資源があるため観光業を生かし家庭の経済レベルを一段階上げることを目指している
2. バネパ市シナガール区長
専門職業トレーニングを実施することで、住民が自ら仕事を得ることが出来る状況をつくる



感想

渡航前、「初めてのプログラム開催」「発展途上国」ということもあり、私たちは生活・食事・気温・あらゆる面に対して慎重になり過ぎていました。それは、私たちが無意識のうちに日本の便利な生活基準でネパールを捉えていたからだと思います。しかし、地域の方との交流や現地の生活体験を通して、私たちの勝手な想像は次第に緩和され、地域に馴染むことの楽しさを発見するようになりました。

ネパールプログラムの主な活動であった「ボランティア」では、その魅力に引き込まれました。私たち学生は、課題やアルバイトに追われる日々の忙しさから「労働」=「対価」と捉えてしまいがちです。その一方で、ボランティアは、地域の人々と共に、私たちが主役となり新たな環境を創り出すことで、自分自身の自主性や表現力が自然と育まれる最高の機会です。それは、個性を引き出し、「自信」という価値を生み、ネパールの生活を一歩踏み出した体験をする勇気にも繋がりました。

プログラム全体を通して、ネパールではあらゆる社会問題と共存していると実感しました。例えば、「交通インフラ」や「下水問題」のように表面化されている問題もあれば、「人身売買」のように内面化されMaiti Nepalを訪れなかったら知らずに済んでいた問題もあります。これらの問題はネパールだから存在しているのではなく、世界各地での問題です。今回、発展途上国の1国であるネパールに目を向けられたことで、多角的な視野や、あるものだけで「生きぬく力」を持つことに繋がりました。

